

# 令和6年度 第1回総合計画審議会 会議記録

## ■開催概要

---

- 1 日時 令和6年10月11日（金） 15:00～17:00
- 2 場所 第1委員会室
- 3 委員の出欠状況 18名中17名（1名書面による意見提出）
- 4 事務局職員

小野企画経営部長、鈴木企画経営部次長、阿部企画課課長補佐、近藤主査、佐藤主事

## ■委嘱状交付・市長あいさつ

---

市長から出席委員に対して、委嘱状を交付した。交付後、市長からあいさつがあり、あいさつ後、市長は退席となった。

## ■会長・副会長の互選

---

互選により、柳井委員が会長、柴田委員が副会長となった。

## ■会議録等の取扱いについて

---

委員の合意により、会議録等については、次のとおりとなった。

- 1 公開を原則
- 2 会長以外の発言は個人名を付けずに「委員」というかたちで会議録掲載  
※そのため、発言中、委員の特定となる部分についても、意味内容が変わらない範囲で調整
- 3 審議会の委員名簿は公開

## ■会長あいさつ

---

▽総合計画は市の方向性を示す大事な計画である。知識ではなく知恵を出しあう会議を行い、生きた計画とするため、多賀城市ではこうするとカスタマイズしながらご意見を頂戴したい。

## ■議事事項概要及び結果

---

### 議事(1) 第六次多賀城市総合計画後期計画の方向性について

事務局（阿部課長補佐）から、資料に基づき一括説明。資料に対する質問はなかった。

### 議事(2) 意見交換

会長の進行により、以下のとおり意見交換

▽これまで他市町を移り住んできたが、多賀城市は利便性と自然のバランスが良く、住みやすいと感じる。将来都市像、重点テーマに対する意見としては、「はぐくむ」「つなぐ」「Tagayasu」シンプルだがとても重要なテーマである。転出入を繰り返す中で人とつながる事やその土地を知ること避けていた時期があったが、日々のなかでどこか喜びや幸せを感じられない瞬間が多々あった。その経験もあり、人とつながる、自分が主体となって地域に関わっていくことは「日々のよろこび」に繋がっていくと感じる。多賀城市の問題・課題は、多賀城市は転出入が激しいと認識している。その状況の中でいかに土地に対する愛着形成をしていくかが一つカギになってくるのではないかと。後期計画の方向性にもある、起業しやすい環境への取り組みや稼ぐ力の創出といった部分は定住につながる大事なポイントではないかと。まちづくりについて期待することは、少子高齢化、働き手不足が進むなか、縮充は必要不可欠な事である。その中でも、学生の力は地域の活性化に必要な大きな力を持っていると感じる。是非、まちづくりや地域に子供達・学生が積極的に参加してくれる、活気あるまちになってほしいと願う。（委員）

▽新しい人の流れの創出、文化財の利活用について意見したい。南門が完成し、ランドマーク的存在が出来た。ここから文化観光に力を注ぐ必要があると感じる。文化庁が文化観光の推進につい

て提言されている。東北歴史博物館を観光施設の拠点と捉え、定期的なプログラムや人材育成をできればいいと想像する。県の施設ではあるが、文化財の利活用の面で上手く組み立てられるとよい。市民が学んだことをより発信できるような、ともに学び文化発信を担う人材育成もより活発化されるとよい。若年層の参加が増えて欲しい。（委員）

▽大規模ほ場整備が終わり、農家の集約化、人数減少が進み、1農家あたりの面積が大きくなっている。5年前にはなかった問題が出ている。例えば、設備投資への懸念や農業の環境保全、高齢化などがある。知識よりも知恵がでる建設的な会議になるとよい。（委員）

▽文化財をいかに活用するかが重要である。近隣2市3町や仙台市も含め広域連携を活用し、巻き込みながら進められると良いと考える。多賀城市を中心中核として推進できるとよい。次に、元々総合計画で政策が7つあるが、柔軟性を考え、どこにより重点を置くか見極めが必要である。東北学院大学工学部の移転や多賀城南門の完成など前期計画策定時の約5年前と大きく変わり、今後時代の変化はどんどん速くなっていると感じるので、将来都市像をどう見据えるかも重要な視点である。また、目指すべきまちづくりを達成するためには財政基盤の維持についてもしっかりと考える必要もある。（委員）

▽元々の多賀城市のイメージは、仙台市に近くて通いやすい、なんでもあるけどなにもないまち、面白みがない、城跡しかないのにいつまで1300年前の歴史にしがみつくなかというものだった。東日本大震災後に、地域の取組みに積極的に関わるようになり、人との関わりを意識するようになった。今後、得意分野を生かして後期計画に反映させたい。（委員）

▽東日本大震災の経験を知らない子どもが増えてきており、知らないというのは1番危険であるため、知ってほしい。また、災害が発災したときに素早く行動できるような知識の蓄えができると良い。また、若者が多賀城市に対してどう考えるのか意見したい。多賀城市が創建1300年ということを知らない人が多く、存在自体を知らなければ魅力を伝える以前の問題であるため、認知されるということも大切である。（委員）

▽東日本大震災を知らない世代への震災記憶の継承を重要と考える。また、市内小中学生にもっと多賀城を知ってもらうために「はぐくむ」「つなぐ」「Tagayasusu」が大事である。多賀城を知り、誇りに思い、市外の人に発信できるようになってほしい。他市町村の人から見ると、多賀城市といえば図書館や中心市街地のイメージが強い、もっと国府多賀城駅方面の多賀城跡等も知ってもらえるような取組みができるとよいと考える。審議委員の打診を受け、改めてSNSやホームページを見たが、自分が知らなかったことが多かった。様々なイベント等もたくさんあるのに、中々伝わっていないと実感したので、上手くSNSを利用し情報発信を行い、魅力の周知ができると良い。（委員）

▽重点テーマの「市民の誇りとなる多賀城らしい魅力をたがやすまち」が重要だと考える、実際に多賀城市民が多賀城市の魅力はどう思っているのかが気になる。多賀城市民は多賀城市を悪く言うや、多賀城市って何も魅力がないと言ってしまうのが課題だと考える。何もないのではなく、あることを知らないと思うので、知る機会を作っていきたい。また、イベント等の若年層の参加が少ないため、学生等が多賀城市について考える機会を作りたい。市でやれる限界があるので、プレーヤーになりたい。（委員）

▽多賀城市は仙台市と比べて繋がりが強い部分もあると感じる。人口減少・少子化が進んでいるが、繋がりを求めている人は増えているのではないかと感じる。コロナ禍を経て、孤立から交流を求める方が増えた印象があるため、いい繋がりを持ちながら様々な人と協力することができないかと思っている。多賀城市で子育てしてよかった、住んで良かったと思えるような市にしたい。転

出入が多い市ではあるものの、子どもの頃からずっと住み続けている方もいる。知っている人には有益に使える施設や情報がたくさんあるが、知らない人たちや行けない人たちにどう魅力を伝えていくかが課題である。メインフレーズはとてもわくわくするので、市民に多く知ってもらうため、より良い方法の知恵を出し合いたい。（委員）

▽高齢化・人材不足によって、高齢者団体が減っている。国の制度改正などで生活が大変になっており、今後高齢化はもっと進むので、市として高齢者に優しい目線を入れて欲しい。バス無料化にはスマホが必要だが、中々使いこなせない人も多く、その実情をわかってほしい。また、高齢化するとみんな認知症気味になってきているが、ずっと家の中にいる人は誰とも情報共有できず、不安感が強い。家の外に出て、集まって対話することで不安感が解消されることもある。子どもも大事だが、介護ではなく高齢者の健康寿命延伸のための取り組みも検討してほしい。（委員）

▽多賀城市の特徴の一つとして、市内小中学校全校に文化的な経験者（茶・能楽など）がこども教室で指導しており、それを文化祭で発表していて、他市町村にはない取り組みである。末の松山や興井など、文化的な遺産が多いので、文化活動も大事にしたい。よく周辺を散歩するが、多賀城市にはいいものがたくさんあるため、ルートを作るなどどう生かしていくか考える必要がある。（委員）

▽コロナ禍で、価値観の変化やデジタル化の急速な進行など、社会環境が大きく変わった。地球温暖化での異常気象や災害が頻発しており、私たちを取り巻く環境が著しく変化している。後期計画を策定するにあたり、そこを踏まえて見直しする必要があると感じている。その中で、一番問題意識を持っているのは、稀有な歴史を持つ自治体にありながら、魅力や価値を市民自体に認識されておらず、外部の人にも認識されていないことである。多賀城南門が完成し、創建 1300 年記念事業で様々なイベントを行っているので、これを契機に多くの方に知ってもらえるように取り組むことが課題である。（委員）

▽多賀城市民は多賀城市の魅力を語りたがらないが、大いに誇りを持っていいと思う。多賀城は由緒ある歴史の町ということを大きなメリットとしてアピールしてもいいと考える。多賀城市には東北学院大学工学部が所在していたこともあり、教育文化のイメージが強かったので、歴史のまち、教育文化のまちであると、アドバンテージとして堂々と自信を持ってよいと思う。教育文化や歴史をどう育んでいくか・醸成していくかは、色々な人と繋がり、共感者を求めながら、ゆっくり時間をかけて根気よく進めるものと考え。重点テーマは歴史芸術文化を醸成するのに、非常によい言葉である。このテーマを継続し、アイディアを出しながら意味を付け加えて盛り上げていきたい。次に、人口減少・少子高齢化が課題と考えている。企業等でも深刻な課題であり、市としても例外ではない。財政問題も厳しくある中、多賀城の魅力を独自に出すための特定のお金を節約することにならないようにしたい。様々な工夫を講じて人口減少・少子高齢化の対応策を検討し、手を取り合っていきたい。多賀城の地だからやっていくんだという強い気持ちをもっていきたい。そして、利便性・公平性・効率を重点的に考えて計画を立てるべきと考える。物を作っても有効活用できない施設も多々あるため、財政をひっ迫しないようにしたい。（委員）

▽重点テーマ、将来都市像を含めて大きく変更する必要はないと考える。今までを踏まえて論議できるとよい。前期計画が終わるころに、一般市民を含めた総括をする機会を設けてもよいのではないか。次に、人口減少・少子高齢化は大きな社会問題である。地域という小さなコミュニティでも、孤立や孤独死、役員不足など大きな問題となっている。政策 2 の支えあいのあるまちづくりの充実を図りたい。市全体に支えあいがあると高齢化への心配や不安がなくなる。また、支えあいができれば、他の政策を含め様々な問題が解決できると考える。それから、宮城県における

多賀城市の立ち位置はどこなのか。仙台市の隣にあるが、仙台市ではないので、飲み込まれないようなまちづくりが必要である。松島や七ヶ浜は海を生かしたまちづくりを行っており、隣にある多賀城市はなにか関わることができるのではないかと。交通アクセスがとてもよいので、そこも生かす必要がある。史跡歴史の中にあるコンパクトシティを売り込むことができないかと思っている。（委員）

▽重点テーマの「Tagayasu」という言葉を使うことで、自分たちで作るということが見えてとてもよい。多賀城の魅力発掘だけでなく、担い手の育成に繋がるとよい。次に、物価高騰や人材不足の問題は他地域も同様であるが、他地域と異なるのは東日本大震災を経験したことである。異常気象も相まって工場等にひずみがでているなど、震災からの蓄積が問題・課題である。市として魅力があるまちは、お金が稼げるまちでもあるので、創業雇用が増え、活性化するためにも魅力を発信できるまちづくりを進めたい。（委員）

▽基本構想は大きく変更しなくていいと思う。コロナ禍を経て、個々の問題が大きくなり、問題じゃなかったものが顕在化してしまった印象がある。地域においても繋がっているつもりが繋がっていないかった、伝わっていないかったということがあり、意識的に繋がないと繋がらなくなっている。全体的に繋がる努力が必要な時代となった印象がある。（委員）

▽多賀城市の印象は、仙台市に近い、中心部から泉や富沢と時間と距離が変わらない。重点テーマの「Tagayasu」の印象が良い、創建から1300年積み重なった土壌の上に、空気を入れて種を植えて新しい魅力をしっかり作るという想像ができた。また、市町村内総生産を確認したところ、宮城県は9兆円、多賀城市は1,725億円で、多賀城市の1位不動産業、2位公務、3位製造業であった。2位公務が15.6%でかなり高く驚いた。都市型産業になると飲食が増えたりするが、製造業が強いという状況である、公務が高いというのは、今後稼ぐ力を考えたときにヒントになると思う。次回で構わないので割合を押し上げている要因を事務局から教えて欲しい。まちづくりについて先ほど来から出ている「Tagayasu」と連動するが、東北学院大学工学部が移転され、広大な敷地で新しいチャレンジができる土壌があり、耕した地にどういう種を植え育てていくか考えることができる。土地については民間事業者が購入したことは聞いているが、市としてどう関与し市民の暮らしを豊かにしていくか、とても重要である。総合計画策定時にはなかった話だと思うので、後期計画にどう位置付けるか考える必要がある。また、多賀城南門が完成して、中央公園に県内初のPark-PFIという手法で新しい要素を入れるのであれば、どうまちづくりで生かしていくかを検討する必要がある。（委員）

→（会長）質問が出た公務が高い理由として事務局は答えられますか。

→（小野企画経営部長）公務の労働生産性が高い理由は、詳しく調べてはいないが、小さなまちながら国の出先機関が多い。自衛隊駐屯地など公的機関も多いのが公務の労働生産性を引き上げている要因と考えられる。市の面積が小さくて人口が多いと公務の労働生産性が多いことがある。

→（委員）自衛隊の異動は人口動態に大きく影響する。自衛隊は年2回異動があり、毎月統計も大きく変わる。

→（会長）自衛隊は機密保持や定期異動があるので、地域づくりに参加するのがなかなか難しい。

▽地域づくりのためには、基本的に人には目標を与えなさいと言われている。理想は、市民にそれぞれ目標を持ってもらうことなので、この計画を通じて目標を持たせられるような仕組みづくりを考えたい。企業活動については、利益を生み出せるように仕掛けづくり・地域づくりが大事である。企業活動が停滞・衰退してしまうと暮らしが成り立たなくなる、生活の基盤は産業活動になるので、適正な利益を保証していくような地域づくりを考える必要がある。最後に、政治家の

役割だが、地域には夢が必要である。日本人の地域づくりには夢がないが、そのロジックを打ち破り、仕掛け・仕組み化することが必要である。属人化しないで、まち全体で仕組化させたい。地域づくりは、人づくりに始まり人づくりに終わる、つまり後継者を育てて地域づくりを構築することである。この委員会はチームであり、良いチームとは現場に近いことなので、他市から来る人は外からの目線を、中の人には現場をより深く知り中身を把握し、総合計画に埋め込んでいきたい。知識ではなく知恵を出し合いたい。知恵を出し合って仕組化を行い、強い現場を作って多賀城市に貢献をしていきたい。（会長）

#### ■事務局からの連絡

---

▽令和6年度第2回開催は、令和6年12月か令和7年1月を予定。別途日程調整

▽事務局としても総合計画について市民の皆様へわかりやすく伝える手段を検討している。よいアイデアがあれば随時教えていただきたい。

以上